

将軍戦記

神の子

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ドイツ軍最高の頭脳と言われたマンシュユタイン閣下がもし幼女戦記に転生したらの話です

目次

第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
27	17	12	6	1

第1話

私の愛する祖国は二度の大戦を経験し、そして敗れた。

將軍だった私は祖国のために、必死に戦った

敗戦後は祖国復帰のために尽力を尽くした。

そんな嵐のような私の人生も幕を閉じようとしている

「私の人生は、まるで嵐のようだったが、その嵐もまさにすぎようとしている。とても苦しく、そして面白い人生だった」

1973年6月10日エーリツヒ・フォン・マンシユタイン死去

と、思ったが

？「ごきげんよ、人間、死の世界はどうだい？」

死の世界？何を言っているんだ私は死んだはずだ、しかし誰だ、

？「そー慌てるな、私は君たち人間が讃える神だ、少し君に話があつてね。」

「話？神はいつたい私に何をしろと？」

神「まあ、簡単に言えば第二の人生を歩んで欲しい」

「第二の人生？」

神「そうだ、実はこの世に我ら神を讃えない不当な輩がいるんだか、そいつを懲らしめるために過酷な人生を歩ませたものの少し過酷すぎて

な、私も鬼ではない。少しだけ希望の光をやろうと思つてな、そこでお主にそいつの手助けをしてほしいるんだか」

「私ですか？なぜ私なのですか？」

神「そなたにそれほどの力があるからだ。連合に『最も恐るべき敵』と言われたマンシユタインお主ならな」

「わかりました。神がそれを望むなら私は神にしがいます。」

神「よろしい。よろしく頼む」

「、、、、」

「殿、、」

「佐殿、、、、」

「中佐殿、、」

エーリツヒ「は！、ここはいつたい」

副官「中佐殿？お疲れのところすみません、帝国参謀本部から出頭せよとの命令が」

エーリツヒ「帝国参謀本部だと？何を言っているんだ君は？」

いったいこの若者は何を言ってるんだ。見た限りドイツ軍の軍服を着ているな。

副官「中佐殿？」

エーリツヒ「すまんが今日の新聞をくれないか」

副官「はっ、こちらです」

エーリツヒ「!？」

どういうことだ1916年!?だと昔に戻ってしまったのか?しかし新聞を見る限り戦争は起こっていない、どうなっているんだ。

数分後

状況は理解した。

まずこの世界は私が生きていた時代と少し違ってこの帝国は新しくできた国で周りの列強諸国から睨まれていること

そしてこの世界はまだ一度も大戦が起こってないこと

最後にこの世界には魔法という不思議な力があること

エーリツヒ「魔法か、」

帝国参謀本部に向かう車の中で私は一言漏らしてしまった

副官「中佐殿は魔法に興味がおありで？」

エーリツヒ「まあそうだな、ところで、えー、」

副官「ブレドウです。 中佐殿」

エーリツヒ「すまんすまん、どうも名前を覚えるのが苦手で、それでブレドウ中尉、我々帝国は魔法についてどこまで分かっているのかね？」

ブレドウ「現在帝国は魔法の研究に力を注いでますが、未だ完全制御には至っていません」

エーリツヒ「そうか、」

魔法か、私の世界にはなかったがこれはなかなか面白い。

ブレドウ「しかし、近頃、研究が成功し戦力になることが判明しました。現在帝国は魔法を操る魔導師を育成中です」

エーリツヒ「なるほどな、それは今後に期待だな」

そう言っている間に帝国参謀本部についてしまった

はてはて何を言われるのやら

コンコン

エーリツヒ「マンシユタイン中佐、入ります」

「入りたまえ」

エーリツヒ「失礼します」

ルーデンドルフ「おー、お初にお目にかかるよ。マンシユタイン中佐、私は参謀本部
作戦参謀次長のルーデンドルフだ。」

エーリツヒ「はっお目にかかれて光栄であります。」

ルーデンドルフ「早速だか君に昇進命令だ」

エーリツヒ「は？」

ルーデンドルフ「マンシユタイン中佐、君は今日を持って准将に昇進、参謀本部作戦
部に来てもらう。」

第2話

まさかきていきなり2階級特進か転生する前の私はいったい何をしたのだろうか

エーリツヒ「はっ、ありがとうございます。」

ルーデンドルフ「さて、今日貴様を呼んだのは昇進命令の事だけではない。」

エーリツヒ「と、申されますと？」

ルーデンドルフ「貴様が参謀本部に提出した論文『今後の戦争とその対応について』がかなり話題になってな。」

そんなものを自分は書いていたのか。あとで読まなければ

ルーデンドルフ「そこで参謀本部はより具体的な研究を貴様に求めている。明後日までに論文を提出したまえ。」

エーリツヒ「了解しました。失礼します。」

ブレドウ「お疲れ様です。そして昇進おめでとうございます。」

エーリツヒ「ありがとうございます、これからもよろしく」

参謀本部に移動したマンシユタインは自室で静かに論文を書き始めた。

エーリツヒ「この世界は一度も大戦を経験したことがない。そのため上層部は歩兵による塹壕戦が勝利への鍵と考えているものが多い。これをどうにかせねば。」

2日後 参謀本部にある論文が提出された

「『新戦術及び魔導師、戦車による機動重視の部隊設立について』」

内容

- ・これからの戦争は国家の国力を総動員して戦う総力戦になる
- ・塹壕戦ではなく機動重視の短期決戦を目的とした電撃戦の研究が必要
- ・歩兵支援の戦車ではなく攻撃と、機動に優れた戦車の開発
- ・魔導師による部隊の編成

数日後

ブレドウ「閣下、参謀本部から出頭命令です。」

エーリツヒ「了解した。」

論文のことだろう今まで見たことのない論文を提出したのださぞかし参謀本部は驚いただろう

参謀本部の長い廊下を歩きながらマンシユタインは今後の事を考えていた。

コンコン

エーリツヒ「エーリツヒ・フォン・マンシユタイン准将、入ります。」

？「入りたまえ。」

エーリツヒ「失礼します。」

部屋に入ると帝国軍の名だたる將軍方達が座っていた。

？「よく来たな。マンシュタイン准將。私は參謀本部總長ヴィルヘルム・エドバー元帥だ。」

エーリツヒ「はっお目にかかれて光榮であります。」

エドバー「早速だか本題に入ろう。君が提出した『新戦術及び魔導師、戦車による機動重視の部隊設立について』だが色々興味深いものだった。」

エーリツヒ「はっ、ありがとうございます。」

エドバー「この論文にはこれからの戦争は国力を総動員して戦う総力戦になり、歩兵による塹壕戦ではなく機動重視の戦車及び魔導師が勝利の鍵ということだったな。」

エーリツヒ「はい。歩兵による塹壕戦ではなく、短期決戦を目的とした電撃戦、そして機動重視の戦車及び魔導師が勝利の鍵であると私は確信しております。」

エドバー「ふむ。まず電撃戦とはどのような戦法かね？」

エーリツヒ「はっ説明いたします。」

マンシュタインは机の地図を指し説明を始めた。

エーリツヒ「まず機動重視の戦車部隊を一箇所に集中し、敵の防衛戦を突破。後方の

補給路を及び司令部連絡線を遮断します。そして後続の軍で包囲した敵を殲滅します。」

エドバー「しかし後続の軍がそのスピードに追いつけないのではないか？」

エーリツヒ「確かに歩兵ではスピードに追いつけないかもしれませんが。そこで魔導師です包囲した敵を魔導師によって殲滅する。つまり戦車及び魔導師による攻撃、歩兵による防御であります。」

説明し終わった瞬間ざわめきが部屋に響いた

？「戦車及び魔導師による攻撃だと？」

？「リスクが高すぎる」

？「そんなわけのわからんものより歩兵による塹壕戦の方がいいのでは？」

エドバー「マンシュタイン准将、君の言いたいことは理解した。だかないささか問題がある。」

エーリツヒ「問題とは？」

エドバー「現在帝国は魔法の研究に大変力を入れており、その他の列強諸国より優れているのは理解している。また新たな戦力になるともな」

エーリツヒ「はい、そこで、」

エドバー「だかな。魔法は未だ未知の世界だ。技術部からの報告では魔導宝珠による

完全制御ができてないという。そんな怪しいものより歩兵による塹壕戦の方がいいのではないか？」

エーリツヒ「しかし、歩兵による塹壕戦は戦争を長引かせます。塹壕のつたりとられたりの繰り返しそんな中で複数の国から攻撃された場合、戦線は崩壊します。」

エドバー「確かにそうかもしれないが、我ら帝国はその他の国より国力がある。そう簡単に負けんよ。」

やはり、上層部は歩兵による塹壕戦が全てという古典的な考えを持った方が多い。確かに他の国ならそれでいいが帝国は違う列強諸国から囲まれている帝国は地形的に不利

ましては新しくできた国だ列強諸国からあまりよく思われていない。

しかもこの頃協商連合が怪しい動きを見せているという、もし協商連合と戦争になったらすれば共和国、連合王国、ダキア公国、ルーシー連邦などがこぞって宣戦布告するに違いない、そうなれば戦力の分散は必至

帝国は崩壊する

エーリツヒ「しかし、元帥閣下、我が帝国は、」

エドバー「確かに帝国は地形的に不利な状態だ。だがな魔法という未知のものより歩兵戦の研究の方が期待できる。」

そんな話が続き、最終的に新戦術と戦車及び魔導師の研究することは許されたが実践投入はまだまだ先だろう

頑張つて研究せねばもう二度と敗戦などなるものか。

マンシユタインが部屋を後にした後

エドバー「新戦術及び戦車と魔導師の部隊設立についてか、」

將軍「確かに魔導師などは戦力になるかもしれませんが、未だ研究不十分です。そんな怪しいものより歩兵戦の方がマシです。」

エドバー「まあこの論文ものより良いこと言っている。頭の隅には置いておこう。」

將軍「閣下、あの二人ならこの論文を理解するかもしれませんがな。」

エドバー「あの二人とはゼートウーアとルーデンドルフのことか？」

將軍「はい、あの二人も魔法に興味があるそうなので」

エドバー「確かに、読ませてみる価値はありそうだな。」

第3話

参謀本部を後にした日から1週間後

1916年12月4日

マンシユタインはゼートウーアのもとを訪ねていた。

エーリツヒ「マンシユタイン准将入ります。」

ゼートウーア「うむ」

エーリツヒ「失礼します。」

ゼートウーア「やあエーリツヒ・フォン・マンシユタイン准将、君の噂は聞いているよ。」

エーリツヒ「はっ光栄であります。早速ですが、閣下に」

ゼートウーア「わかっている。論文のことだろう？私も読んだ。」

エーリツヒ「それでどうお考えですか？」

ゼートウーア「確かに革命的な戦術だ。だがな、上層部は首を縦にふらないだろう。」

エーリツヒ「なぜですか？」

ゼートウーア「君も知っているだろう？1912年の共和国との戦争を？帝国誕生を

良しとしない共和国が宣戦布告し、始まった戦争を。」

1912年共和国と帝国の戦争

帝国誕生を良しとしない共和国が不法越境して起こった戦争である。

早く終わると思われていたが戦争は膠着

連合王国を仲介とし、戦争が終結した

大戦にはならなかったものの激しい戦争が繰り広げられ

塹壕戦や塹壕を突破するための戦車などが開発された。

あまりに激しかったため戦争終結後世界各国で集まり、捕虜の扱いなどが取り決められた。

エーリツヒ（私の世界よりも時代の流れが早いな）

ゼートウーア「あの戦争の時、初めて歩兵の塹壕戦があったのだ。あの戦争から帝国上層部は熱心に塹壕戦の研究をしている。その成果を捨てて新たな戦術を研究するなど上層部は認めんだろう。」

エーリツヒ「ですが、」

ゼートウーア「まあ研究資金は出るだろうが、実践投入はすぐには無理だな。」

エーリツヒ「わかりました。最後にもう一つだけ」

ゼートウーア「何だ？」

エーリツヒ「私の戦術は機動が命であり、そのためには、燃料つまり石油が必要ですが、現在帝国はその補給体制を整えていません。」

ゼートウーア「私にその補給体制をととのえよと？」

エーリツヒ「はい」

ゼートウーア「私も貴様の考える戦術には興味があるだけ力を貸そう。だがな帝国全土を整えるには莫大な時間がかかる。」

エーリツヒ「どのくらいかかりますか？」

ゼートウーア「石油採掘場や輸送システムなどを全部整えるなら約5年は必要だ」

思ったよりかかるな。確かに一から新たな補給体制を作るのだそのぐらいかかって当然か

となると完成は1922年か、

エーリツヒ「わかりました。どうかよろしくお願いします。」

マンシュタインが部屋を後にした後

ゼートウーア「新戦術のための新たな補給体制の構築か、ふっやってみる価値はあるな。副官！」

副官「はっ！」

ゼートウーア「鉄道部などの連中を集める。忙しくなるぞ」

副官「り、了解しました！」

1916年参謀本部ゼートウーア准将が提案した新たな補給体制構築『N a t i o n a l e B o d e n r e f o r m (国土改革)』始動

1918年計画の42%が完成

1920年計画の78%が完成

1922年計画の100%完成

エーリツヒ「長かったが完成しましたか」

ゼートウーア「ああ、貴様が提案した新たな補給体制のおかげで物流の流れも良くなった。これで帝国もさらなる発展になる。」

エーリツヒ「ええ、とても喜ばしいことです。」

ゼートウーア「もう一つ朗報だ。戦車研究資金が確保できたぞ。」

エーリツヒ「やつとですか。長かったですか。これであの棺桶のような戦車ではなく新たな戦車開発ができます。」

ゼートウーア「まあ。頑張りましたまえ。ところで話が変わるが、協商連合の事を聞いた

か？」

エーリツヒ「はい、なにやら国粹主義政権が成立したとか。」

ゼートウーア「ああ、奴らは帝国を侮っているなにをしでかすかわからん。」

エーリツヒ「確かに、注意しといたほうがよさそうですね。」

ブレドウ「閣下、例の噂を聞きましたか」

エーリツヒ「噂？」

ブレドウ「はい。何と8歳で士官学校に進学した魔導師がいるらしいという噂です。」

エーリツヒ「なにを馬鹿なことを」

ブレドウ「嘘だと思うかもしれませんがレルゲン大佐が見たらしいんです。」

エーリツヒ「あのレルゲン君がか？ありえんよほど疲れているのか。全くそんな事よりも技術省に行くぞ。」

ブレドウ「了解しました。准将閣下」

第4話

帝国技術省

エーリツヒ「失礼するよ。」

研究員「これはこれはマンシユタイン閣下、ご無沙汰しております。」

エーリツヒ「やあ、君も元氣そうだね。ところで例の物はできたかい？」

研究員「ええ、こちらへ」

奥に行くとも一台の戦車がおかれていた。

研究員「こちらが帝国の新型戦車3号戦車です。」

エーリツヒ「やつとできたか。」

研究員「はい。この戦車は従来の歩兵支援用ではなく、機動及び攻撃重視のものであります。これさえあれば閣下の推奨なさる新戦術にも対応できます。」

ブレドウ「これはすごい。」

エーリツヒ「これがこの戦車の資料か？」

研究員「はい。閣下が出された基準数値を全て達成しております。」

資料

3号戦車

全長6, 41 m

車体長5, 56 m

全幅2, 95 m

全高2, 51 m

重量2, 27 t

速度40 km/h (整地)

19 km/h (不整地)

主砲60口径KwK39

エーリツヒ「素晴らしい出来だな。」

研究員「ありがとうございます。」

エーリツヒ「それでいつ頃大量生産できる?」

研究員「それがですね、なにせ今までにない戦車なので生産体制が整うには少し時間がかかりまして。」

エーリツヒ「そうか、」

研究員「5ヶ月後ぐらいには生産を開始できると思います。」

エーリツヒ「うむ。楽しみにしてるぞ。」

マンシュタインは満足しながら技術省を後にした。

全て思い通りになっていたかに思われていたが地獄への歯車はすでに動き出ししていた。

1923年5月14日

ブレドウ「閣下!!」

副官のブレドウ少佐がすぐ焦った顔で部屋に入ってきた

エーリツヒ「どうした。ブレドウ少佐、ノックもせず」

ブレドウ「閣下、一大事であります。」

エーリツヒ「どうした?」

ブレドウ「戦争です」

エーリツヒ「何?」

ブレドウ「協商連合が不法越境を行い帝国国境警備隊と交戦を開始。現在も継続中
す」

エーリツヒ「なんだと!? つつ、作戦部に行くぞ」

ブレドウ「はっ!」

まさかこんなに早く戦争が起きるとは、

作戦部内はとても慌ただしく将官達があちらこちらへと走り回っていた

エーリツヒ「ルーデンドルフ閣下!!」

ルーデンドルフ「マンシュタインか、貴様も聞いたな。」

エーリツヒ「はい。それで今の状況は？」

ルーデンドルフ「国境警備隊がなんとか止めているが、長くは持たん。すぐに軍を派遣したいがまだ動員が間に合っていない。最初は苦しい状況が続くだろう。」

エーリツヒ「そうですか」

ルーデンドルフ「なーに、動員が完了すればすぐに叩きのめすさ」

確かに協商連合1国なら問題はない。しかしこれを機に周辺諸国が一斉に襲ってくるのではないかとマンシュタインは心配していた。

ルーデンドルフ「どうした？マンシュタイン」

エーリツヒ「閣下、動員はいつ完了しますか？」

ルーデンドルフ「早くて明日だ」

エーリツヒ「閣下、此度の戦争、2正面もしくはそれ以上になるかもしれません。」

ルーデンドルフ「なんだと？協商連合以外にどこが攻めてくるのだ？」

エーリツヒ「共和国、かと」

ルーデンドルフ「共和国？何故だ？」

エーリツヒ「奴らは帝国の弱体化を狙っております。そんな奴らにとって今は絶好のチャンスでしょう。閣下動員が完了したら共和国方面にも兵を用意しとく事を提案します。」

ルーデンドルフ「まあ備えて損はないだろう。」

1923年5月16日

将官「ルーデンドルフ閣下!!」

ルーデンドルフ「どうした!」

将官「き、き、共和国が帝国に宣戦布告してきました!」

ルーデンドルフ、マンシュタイン「!!」

やはりか、

? 「共和国だと!」

? 「まさかの2正面作戦か」

? 「そんなばかな」

ルーデンドルフ「チツ、マンシュタイン、貴様の読みが当たったようだな」

エーリツヒ「ええ、できれば当たって欲しくなかつたですが」

ゼートウーア「話は聞いたか? ルーデンドルフ」

作戦部にゼートウーア准将が入室した

ルーデンドルフ「ああ、共和国が宣戦布告してきおった。」

ゼートウーア「そのようだな」

ルーデンドルフ「マンシュタイン、共和国方面は何師団いる？」

エーリツヒ「10個師団おりますが、多分膠着するでしょう。」

ゼートウーア「戦車師団は使えんのか？」

エーリツヒ「まだ生産数が足りません。後2ヶ月は必要です。」

ゼートウーア「そうか。」

ルーデンドルフ「仕方ない。戦力が整うまで耐えるしかないな」

ゼートウーア「そうだな」

ルーデンドルフ「マンシュタイン、貴様は北部戦線に行つて軍の指揮をとれ」

エーリツヒ「はっ」

ルーデンドルフ「いいか。攻撃はせんでもいいが突破だけはされるな。戦力が整うまで持ち堪えろ。」

エーリツヒ「了解しました。」

エーリツヒ「ブレドウ少佐移動だ。」

ブレドウ「はっ、どこに行くのでありますか？」

エーリツヒ「北部へ行って軍の指揮をとる。準備しろ。」

ブレドウ「了解しました。」

北部戦線

テオドール「ようこそいらっしやいました。私は第27歩兵師団師団長ヨハイム・テオドール大佐であります。」

エーリツヒ「北部戦線総司令官エーリツヒ・フォン・マンシュタイン准将だ。早速だが状況は？」

テオドール「今のところは膠着状態を保っておりますが、敵の度重なる攻勢で物資が不足気味であります。」

エーリツヒ「そうか。軍はどれほどいる？」

テオドール「軍は全部で6個師団と少数の魔導師であります。」

エーリツヒ「ふむ」

魔導師か、攻勢をかけられるほど余裕もなく、なおかつ相手の攻撃を止めるのも限界がある、どうするか

ブレドウ「いかなさいますか、閣下」

エーリツヒ「魔導師に敵の補給路を探すよう命令しろ。見つけ次第位置を報告。砲兵隊で敵の補給路をたたく」

テオドール「了解しました。」

エーリツヒ「思ったよりひどいな」

ブレドウ「ええ、確かに」

エーリツヒ「こうなったら敵の補給路を叩き攻勢を止めるしかない。」

数時間後

テオドール「閣下、魔導師が敵補給路を発見しました!!」

エーリツヒ「本当か!? よし魔導師に伝達。即座に敵補給路の位置を報告せよと、後、砲兵隊に砲撃準備しとくよう伝えろ。」

テオドール「はっ」

敵の補給路を叩ければこちらにも余裕ができる。その間に戦力を整えるしかない。

テオドール「敵補給路の位置がわかりました!」

エーリツヒ「砲兵隊に連絡、あいにく弾数に限りがあるため正確に砲撃せよ」

砲兵隊長「砲撃用意!!」

砲兵隊「「砲撃準備完了!!」」

砲兵隊長「撃て!!」

テオドール「やりました閣下。敵補給路を破壊。敵は混乱しています。」

エーリツヒ「歩兵師団に攻勢に出ると伝えよ。しかし深追いはするな。目の前の敵を追い払うだけでいい」

テオドール「了解しました!!」

エーリツヒ「ふう、なんとかなったか。敵補給路を見つけてくれた魔導師には感謝だな。」

ブレドウ「その魔導師ですが、敵魔導師と交戦したそうです。」

エーリツヒ「何? 死んだのか?」

ブレドウ「いえ、戦死はしておりません。しかも驚くことにその魔導師は増援到着まで敵魔導師を拘束。満身創痍となりながらも撃破確実4 不明2の大戦果をあげ敵部隊を阻止したそうです。」

エーリツヒ「なんだと!?!それは本当か?」

ブレドウ「ええ」

なんてやつだ。まるで化け物のようなやつだな。

エーリツヒ「それでその魔導師の名は？」

ブレドウ「その魔導師の名は、、、」

「ターニャ・デグレチャフ少尉というものです。」

第5話

統一暦1923年6月5日

北部戦線

エーリツヒ「はあ、」

ブレドウ「お疲れのようですね。閣下」

エーリツヒ「ああ、まあね」

現在北部戦線をなんとか膠着状態にし、今も戦線を保ってはいるが、少し前に、ダキア公国に宣戦布告され北部戦線の部隊を引き抜かれてしまったため、戦線を突破されぬよう試行錯誤している状況だった。

エーリツヒ「全く、兵が足りんな」

ブレドウ「ええ」

エーリツヒ「戦車師団はまだこんのか？」

ブレドウ「戦車師団の編成は終わっておりますが、ライン戦線に優先的に送られてる
それで」

エーリツヒ「そうか、」

テオドール「閣下、参謀本部から連絡です。」

エーリツヒ「わかった」

エーリツヒ「こちら北部戦線総司令官エーリツヒ・フオン・マンシュタイン准将です」
ルーデルドルフ「マンシュタインか、今日まで、よく持ちこたえてくれた。悪いが参謀本部に出頭してくれんか、戦略会議を開く、君の意見を聞きたい。」

エーリツヒ「了解しましたが北部戦線は誰が引き継ぐのですか？」

ルーデルドルフ「その件についてはもう手配している、安心しろ」

エーリツヒ「了解しました」

戦線会議か、なんとかしてこの事態を打開せんとな

参謀本部

エドバー「みな、集まってくれて感謝する。早速だが、各戦線の状況は？」

エーリツヒ「はっ、今のところ全戦線において膠着状態を維持しておりますが、長く

は持ちません。早急に対応しなければ帝国は崩壊します」

ゼートウーア「そこで、私から一つ提案が」

エドバー「なんだね」

ゼートウーア「現在帝国には機動性に優れた部隊がありません。そこで新たに機動性に優れた部隊が必要です」

エドバー「戦車師団ではダメなのかね？」

ゼートウーア「戦車師団はまだ数が足りず、配備ができておりません」

エドバー「なるほど、そこでマンシユタインや君が唱えていた魔導師の部隊というところか」

ゼートウーア「はい、大隊規模でしたら、差し支えないかと、すでに優秀な人材も集めております」

まさか、ゼートウーア閣下が、そこまで手配していたとは、しかし優秀な人材とは一体誰なのだろうか？

エドバー「なるほど、確かに、よし早速編成したまえ」

戦略会議終了後

エーリツヒ「ゼートウーア閣下！」

ゼートウーア「ん？どうした、マンシユタイン」

エーリツヒ「閣下、いつの間に魔導大隊の手配を整えていたのですか!？」

ゼートウーア「なーに、私も君の提案には賛成だったからな。実現したまでのことさ」
エーリツヒ「ところで、閣下が言う優秀な人材でありますか、一体どのような方なの
でしょうか？是非ともあつて見とうございます。」

ゼートウーア「ああ、君もあつて見るといい、意外と気があうかもしれん」

帝国資料室

エーリツヒ「あの人か」

へやにはいると、たくさんの資料を読んでいる幼女がいた

エーリツヒ「失礼、君がターニヤ・デグレチャフ中尉かな？」

ターニヤ「ん？、!？」

一瞬戸惑った顔をしたが私が誰が気づいたらしく、慌ただしく席を立ち、完璧な敬礼をした。

ターニャ「失礼しました。准将閣下!!」

↳ターニャside

ターニャ「失礼しました。准将閣下!!」

エーリツヒ「そんなに慌てなくてもいい。私は参謀本部作戦部副部長エーリツヒ・フオン・マンシユタイン准将だ」

作戦部副部長!?!後方のお偉いさんじゃあないか!?

ターニャ「はっお会いできて光栄であります。」

エーリツヒ「すまんが、この後用事があるかい?」

ターニャ「いえ、大丈夫であります」

エーリツヒ「すまんが君と話がしたくてね。少しいいかな?」

ターニャ「はい!」

なんとという幸運、ゼートウアー閣下だけではなくマンシユタイン閣下にも会えると
は、今日の私はいてるぞ

エーリツヒ「まあ、かけたまえ」

ターニャ「はっ、失礼します」

エーリツヒ「早速で悪いが、君はこの戦争が世界大戦になると予測したらしいな」

ターニヤ「はい」

エーリツヒ「私にもその理由を教えてくださいませんか？」

ターニヤ「では、説明させていただきます。新生国家である帝国は周辺諸国よりも軍事的優位であります。帝国の軍事力ならば、共和国をも、討ち滅ぼすことができますでしょう。そうなれば、帝国は大陸における絶対的有利を獲得できます。しかし、そのような状況を他の列強が許すでしょうか？」

エーリツヒ「なるほど、そこで君は、敵によりたくさん血を流させる戦法を取るために、今までにない新戦術魔導師による攻撃、歩兵による防御を提案したわけか。」

ターニヤ「その通りであります」

エーリツヒ「なるほど、私の意見とびつたりだな」

ターニヤ「閣下もこのような意見をお持ちでいらしたのですか？」

エーリツヒ「まあ、私の場合、戦車を使った短期決戦を目標とした戦術だからな」

ターニヤ「!？」

驚いた、まさかこの世界に、そのような考えを持つ者がいるとは

ターニヤ「閣下、閣下の新戦術は戦車の機動を使った電撃戦でありますか？」

エーリツヒ「!？」

くマンシユタイン side く

この幼女、最初から他のものとは何か違うと思っていたが、電撃戦を知っているだともまさかそんな

エーリツヒ「中尉、その言葉誰から聞いた」

ターニヤ「いえ、誰からも」

そんなばかな、自分で考えただも!?こやつ、ただものではない、

エーリツヒ「ターニヤ・デグレチャフ中尉、ありがとう、参考になった。」

ターニヤ「はっ失礼します」

ゼートウーア「どうだった?あやつは」

エーリツヒ「とても興味深い話を聞けました」

ゼートウーア「そうか、それはなによりだ、あと貴様にはまた北部戦線に戻ってもら

えーリツヒ「はっ」

ゼートウーア「喜べ、お前が待ち望んでいた戦車師団が配備できた。」

エーリツヒ「本当でありますか！」

ゼートウーア「ああ、だかあいにく物資が少ない、攻勢は難しいだろう」

エーリツヒ「そうですか、ですがお任せください」

ゼートウーア「ああ、期待している」

北部戦線

ブレドウ「閣下、おかえりなさいませ」

エーリツヒ「ああ」

ブレドウ「閣下、つい先ほど戦車師団が到着しました。」

エーリツヒ「ああ、やつとだ、ついでに少数の魔導師ももらってきた」

ブレドウ「では、いよいよ」

エーリツヒ「ああ、新戦術が試せるぞ」

ブレドウ「ちなみに魔導師は、まえにいたあの凄腕魔導師ですか？」

エーリツヒ「いや、彼女は今、帝都だ。なーに彼女に劣らない奴ら連れてきた。」

ブレドウ「ほう。それは楽しみですな」

協商連合兵士A「敵、全然こねえな」

協商連合兵士B「ああ、奴らびびってんじやあねえのか？」

協商連合兵士A「ハハ、そうかもな。ん？お前、何の写真見てるんだ？」

協商連合兵士B「これか？うちの嫁さんの写真だ。まあ、まだ嫁さんじやあないが、帰ったら俺こいつと結婚するんだ」

協商連合兵士A「そいつはめでたい、ん？、何だあれ？」

協商連合兵士B「おい、なんかくるぞ」

男たちが騒ぎ終わった瞬間、多数の戦車が彼らの防御陣地へ突っ込んできた
帝国兵士「行けー！！止まるな！！進め進め！！」

ブレドウ「閣下、戦車師団が敵防衛戦を突破しました。」

エーリツヒ「よし、そのまま敵を包囲!! 魔導師、歩兵が協力して包囲した敵を殲滅せよ!!」

協商連合上官「何だ?! 包囲された!?!、今すぐに救出に向かえ!」

協商連合兵士「ですが、もうすでに包囲された連中は崩壊したそうです」

協商連合上官「くっ、」

ブレドウ「閣下、包囲した敵を無事殲滅しました。しかし、物資的にここが攻勢限界です。」

エーリツヒ「そうか止むを得んな。だが攻勢は成功した。それだけで、喜ばしいことだ」

その頃帝都ではある部隊の設立が、幼女に伝えられていた。